



## 「文化的水準のバロメーター 古代寺院」

今回は、加古川の文化的水準をみるために古代寺院をみていきたいと思えます。

奈良時代に入ると各地域の首長層は律令体制の官人となり、律令体制下に組み込まれていくこととなります。権力の誇示の方法が古墳の築造から寺院の建立へと移っていきます。加古川の東地域では溝之口廃寺（加古川町溝之口）、西条廃寺（神野町西条）、石守廃寺（神野町石守）が、西地域では中西廃寺（西神吉町中西）があります。現時点で発掘調査が実施されているのは、西条廃寺、石守廃寺だけで、その結果から二寺院とも法隆寺式伽藍配置をもつ古い形式の寺院であることがわかります。



溝之口廃寺は、弥生時代前期より当地に勢力をもった権力者が建立したと思われる。溝之口遺跡自体平安時代まで続く加古川地区最大の規模の集落で、寺院建立の時期においても十分な勢力を維持していたものと思われる。石守廃寺は1983・1984（昭和58・59）年に本格的な発掘調査が行なわれた結果、東側に金堂、西側に塔を配置する法隆寺式の伽藍配置であることが明らかとなりました。寺域は中門、金堂、塔、講堂が存在し、推定で1町（100m）四方ぐらいと考えられます。出土物も多く、風鐸や水煙片なども出土しています。



中西廃寺は、縄文時代晩期から古墳時代にかけて加古川西岸で最大の村落であつ

た砂部遺跡の北西に位置しています。発掘調査はなされていないので詳細は不明ですが、加古川東地域の伽藍配置とは異なる形式をもっていたと思われる。

これだけ多くの古代寺院が存在する地域は、多くはありません。そのことは、権力者が権力誇示だけでなく当時の最先端の文化を取り入れる素地がこの地にあったことを示しています。